



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	萬葉集「卷十一・十二」類歌分類覚書
Author(s)	吉川 貫一 (Yoshikawa, Kanichi)
<i>Citation</i>	文林 (BUNRIN), No.5 : 67-93
Issue Date	1971
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

萬葉集「卷十一・十二」類歌分類覚書

吉川貫一

数年前、甲南大学「文学論集三十二号」に「大伴家持における類歌・類句歌についての一考察」という拙論を発表して以来、自分なりに集めた萬葉集の類歌は放置されたままになっていた。今回、卷十一・十二の類歌分類整理を試みたのであるが、なかなか困難な仕事であった。一定の規準を設けて分類しても、不安定に二つの規準の間を動く歌があり、一定の確固たる線に落ち着けるに困難なものがある。一応規準に従って分類はしても、そこから結論らしいものは導き出せない。この拙稿はささやかな試みであって、類歌分類覚書、或はノートぐらいのものにしか過ぎない。

類歌の中にも、おのずから密度の濃淡がある。卷十一・十二における類歌の濃淡の分布を調査することが、この拙稿の目標なのである。前述の拙論では分類規準を同形歌・少異歌・類歌・類句歌と四種類設けたのであるが、問題はこの規準項目の類歌の部である。この中に密度濃淡さまざまな歌が含まれているのである。そこで今回は「萬葉集の類歌・類似句の提起する一二の問題」(「国語・国文」五巻 五号)において、安念正氏のとられた細かい分類規準に基礎をおくこととした。(以下安念分類と称す)安念分類の規準は (一)類句歌 (二)類想歌 (三)類型歌 (四)類句類型歌 (五)類句類想歌 (六)類想類型歌 (七)類句類想類型歌という七項目に亘るものである。これに自分なりの考えを加え変更を試みて規準を設けたのである。例えば(三)の類型歌について、安念氏は「内容の類似も有するが主として修辞上より見て類するもの」とその規準の

説明をされているが、すくなくとも類歌である以上、単なる類型で終るべきものではなく、類句類型か類想類型に属すべきものであるという判断からこの項を除くことにした。(七)の類句類想類型歌については「句も想も共に類似せるもの。同歌、同歌の異伝も一括し、又序歌の想の類するものもここに入れた。四句類する類歌もかりにここにをさむ」という説明がある。しかし「句も想も共に類似せるもの」は類句類想歌に属すべきものであろうと考える。同歌はいわゆる重出歌として編纂上の問題にも関係する重要なものであるので、別に同歌の項を設ける。同歌の異伝の歌は必ずしも、類句類想型の項のみに納まるものとは限らない。(このことは後に述べる)一句ぐらゐの相違の異伝の歌は少異歌という従来の名称に従うこととした。また少異歌とは言えないが、類句類想歌よりは密度の濃い歌も、分類の上から考えなければならぬので、類句類想類型歌の名は残すこととした。結局私の分類規準の項目は次のようになる。なお名称は安念分類にそのまま従っているものもあるが、内容は必ずしも一致していない。

A 同歌 全然異るところのない、所謂重出歌。

B 少異歌 四句全く同じで、他の一句も類似性の強い歌。他の一句のほかは極く一部の語の異同はあるが、歌の想と型を同じくするもの。

C 類句類想類型歌 三句全く同じで、他の二句も類似性をもち、全体として発想構想の類似するものを原則とする。初二句の内容表現はやや異なるが、主想となる下三句が全く同じ歌もここに入れる。序歌の場合、二句序の内容が類似し機能が同じで、下三句が同句または類似句の歌、三句序が全く同じで、下二句が類似句の歌もここに入れる。

D 類句類想歌 二句が同句または類似句で、他の三句も類似性をもち、発想構想の類似するものを原則とする。上三句の内容表現はやや異なるが、主想となる下句が同句または類似句の歌もここに入れる。序歌の場合、二句序の内容と

機能を同じくするが、後の句が類想に終る歌、序の内容機能はやや異なるが、後の句に類似性のある歌もここに入れる。

E類想類型歌 まとまった類句はないが、発想構想を同じくし、典型的な歌。

F類想歌 類句はないが、発想に類似性のある歌。

G類句類型歌 二句以上の類句があり、主想を異にするが、型の上で類似性のある歌。

H類句歌 発想も内容も異なり、単に二句以上の類句のある歌。

Aは厳密な意味で類歌とは言えないが、考察の対象に入れる。BからFまでを類歌とし、GHは類句歌とする。BCが類歌としての密度は高く、D以下次第に密度は薄くなる。次にこの項目別に例を挙げて具体的な説明を加える。

同歌 (歌の上の数字は、卷十一・十二の巻別。歌の下の日本数字は国歌大観の番号。入麻呂歌集、未詳歌(作者未詳の歌)は卷十一・十二中の類別)

正述心緒

11朝影 吾身成 玉垣入 風所見 去子故 (二三九四) ——入麻呂歌集

寄物陳思

12朝影尔 吾身者成奴 玉蜻 髻髷所見而 往之見故尔 (三〇八五) ——未詳歌

寄物陳思

11淡海 奥嶋山 奥儲 吾念妹 事繁 (二四三九) ——入麻呂歌集

寄物陳思

11 淡海之海 奧津嶋山 奧間經而 我念妹之 言繁苦 (二七二八) —— 未詳歌

寄物陳思

11 解衣之 思乱而 雖恣 何如汝之故跡 問人毛無 (二六二〇) —— 未詳歌

寄物陳思

12 解衣之 念乱而 雖恣 何之故其跡 問人毛無 (二九六九) —— 未詳歌

寄物陳思

11 吾背子之 使乎待跡 笠毛不著 出乍其見之 雨零尔 (二六八一) —— 未詳歌

問答

12 吾勢子之 使乎待跡 笠不著 出乍曾見之 雨零尔 (三二二二) —— 未詳歌

寄物陳思

11 奧波 辺浪之來縁 左太能浦之 此左太過而 後將恣可聞 (二七三二) —— 未詳歌

羈旅瓮思

12 奧浪 辺浪之來依 貞浦乃 此左太過而 後將恣鴨 (三一六〇) —— 未詳歌

以上の五組十首である。第二組の歌の第三句は「奥儲」オクマケテ「奥間経而」オクマヘテと訓の相違はあるが、何れも「将来をかけて」という同じ意味であるから同歌と見做す。第三組の二六二〇の第四句の「汝」という文字は、古典文学大系の「意味の理解を助けるために添えられたものと見て不読とした」という説に従って「何のゆゑぞ」と訓み、同歌とする。(同歌についての問題は後に述べる)

少異歌(この項以下、歌は訓み下しとする。巻数は歌の番号と共に()中に示す。圈点筆者。以下同じ。)

朝露の消やすきわが身老いぬともまた若反り君をし待たむ(一一・二六八九)——未詳歌
露霜の消やすきわが身老いぬともまた若反り君をし待たむ(二二・三〇四三)——未詳歌

初句のわずかな相違は、伝誦の間に生じたものであろうが、同歌とは認め難く少異歌とする。

少女等を袖布岬山の瑞垣の久しき時ゆ思ひけりわれは(一一・二四一五)——人麻呂歌集

未通女等を袖布岬山の瑞垣の久しき時ゆ思ひきわれは(四・五〇二)——柿本人麿

三句序の中の助詞一字の相違。結句の一部の相違である。

里遠み恋ひうらぶれぬ真澄鏡床の辺去らず夢に見えこそ(一一・二五〇二)——人麻呂歌集

里遠み恋ひわびにけり真十心鏡面影去らず夢に見えこそ(一一・二六三四)——未詳歌

一句が類似句で、そのほかは一部の微細な異同はあるが、想と型は全く同じものである。

志賀の海人の火気焼き立てて焼く塩の辛き恋をもわれはするかも(一一・二七四二)——未詳歌

志賀の海人の一日もおちず焼く塩の辛き恋をもわれはするかも(一五・三六五二)——遣新羅使人

これも伝誦の間に生じた一句の相違である。少異歌と見做すのはこの四組八首である。なおこのあと巻十七に

須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも吾はするかも(三九三)——大伴家持

という類歌がある。初二句の底の内容が異なるのでこれは次の類句類想類型歌に入れる。

類句類想類型歌

逢はずして恋ひわたるとも忘れめやいや日に異には思ひ益すとも(二・二八八二)——未詳歌

吾が命の全けむ限り忘れめやいや日に異には思ひ益すとも(四・五九五)——笠女郎

初二句の内容表現はやや異なるが、下三句が全く同じである。

隠沼の下ゆ恋ふれば為方無み妹が名告りつ忌むべきものを(二・二四四二)——人麻呂歌集

隠沼の下ゆ恋ふれば飽き足らず人に語りつ忌むべきものを(二・二七一九)——未詳歌

初二句と結句が全く同じで第三句、四句は類似句である。

み空ゆく名の惜しけくも吾は無し逢はぬ日まねく年の経ぬれば(二・二八七九)——未詳歌

劍刀名の惜しけくも吾は無し君に逢はずて年の経ぬれば(四・六一五)——山口女王

これらも前と同様の範疇に入るものである。このようなものを類句類想類型歌とする。次に序歌の例を挙げると

香具山に雲居たなびきおほほしく相見し子らを後恋ひむかも(二・二四四九)——人麻呂歌集

春霞山にたなびきおほほしく妹を相見て後恋ひむかも(二〇・一九〇九)——未詳歌

二句序の内容が類似し機能が同じで、下三句の第四句が近似句であり、全体として類似した想であるところからこの項に入れる。

鴨川の後瀬静けく後も逢はむ妹にはわれは今ならずとも(二・二四三二)——人麻呂歌集

高瀬^{△△△△△△△△△△}にある能登瀬の川の後も逢はむ妹にはわれは今にあらずとも（二・三〇一八）——未詳歌

同じ二句序で、前者は譬喩、後者は音の重複の序で機能は異なるものはあるが、内容は川を媒材として類似するものがある。下三句は全く同じである。このようなものこの項に納める。

類句類想歌

恋ひ死なば恋ひも死ねとや玉梓の路行く人の言も告げなく（一・二三七〇）——人麻呂歌集

恋ひ死なば恋ひも死ねとや吾妹子が吾家の門を過ぎて行くらむ（一・二四〇二）——人麻呂歌集

初二句が全く同じで、下三句が類想に終っているもの

徘徊り往箕の里に妹を置きて心空なり土は踏めども（一・二五四一）——未詳歌

吾妹が夜戸出の姿見てしより心空なり地は踏めども（一・二九五〇）——未詳歌

前と逆の上三句の内容表現をやや異にするが、下二句が全く同じもの。このようなものを類句類想歌とする。

独り居て恋ふれば苦し玉櫛かけず忘れむ事計もが（二・二八九八）——未詳歌

常斯くし恋ふれば苦し暫しくも心やすめむ事計せよ（二・二九〇八）——未詳歌

第二句が同じで、結句は近似句。そして全体として発想構想の上で類似性が強い。このようなものこの項に入れる。

かくばかり恋ひむものぞと知らませば遠く見るべくありけるものを（一・二三七二）——人麻呂歌集

かくばかり恋ひむものぞと知らませばその夜は寛にあらましもを（二・二八六七）——未詳歌

三句同じで下二句の内容表現は異なるが全体として想の類する例である。序歌としては、

石上布岫の神杉神さびし恋をもわれは更にするかも（一・二四一七）——人麻呂歌集

石。上。布。出。の。神。杉。神。さ。び。し。わ。れ。や。さ。ら。さ。ら。恋。ひ。に。逢。ひ。に。ける (二〇・一九二七) —— 未詳歌

二句同句の序で機能も同じであるが、下三句が類想に終る。

宇治川の瀬々のしき波^{△△△△△△}じく^{△△△△△△}に妹は心^{△△△△△△}に^{△△△△△△}乗^{△△△△△△}りに^{△△△△△△}ける^{△△△△△△}かも (二一・二四二七) —— 人麻呂歌集

春^{△△△△△△}され^{△△△△△△}ば^{△△△△△△}し^{△△△△△△}だ^{△△△△△△}り^{△△△△△△}柳^{△△△△△△}の^{△△△△△△}と^{△△△△△△}を^{△△△△△△}に^{△△△△△△}も^{△△△△△△}妹^{△△△△△△}は^{△△△△△△}心^{△△△△△△}に^{△△△△△△}乗^{△△△△△△}りに^{△△△△△△}ける^{△△△△△△}かも (二〇・一八九六) —— 人麻呂歌集

二句序の内容も機能も異なるが、下二句が全く同じで、しかも類似した発想である。以上のようなものを類句類想歌とする。

類想類型歌

斯くしてやなほや守らむ大荒木の浮田の社の標ならなくに (二一・二八三九) —— 未詳歌

斯くしてやなほや老いなむみ雪降る大荒木野の小竹にあらなくに (七・一三四九) —— 譬喩歌 (寄草)

初二句は類句。前者は恋、後者は年の老いゆくのを嘆くという全く異なる内容ではあるが、発想法と型とを等しくするものとしてこの項に入れる。

解衣の恋ひ乱しつゝ、浮沙生きてもわれはあり渡るかも (二一・二五〇四) —— 人麻呂歌集

潮満てば水沫に浮ぶ細砂にもわれは生けるか恋に死なずて (二一・二七三四) —— 未詳歌

いずれも砂に寄せた想、恋に堪えて生き抜く内容。全体として型も類似するものである。

たらちねの母に障らばいたづらに汝もわれも事成るべしや (二一・二五二七) —— 未詳歌

たらちねの母に申さば君もわれも逢ふとはなしに年ぞ経ぬべき (二一・二五五七) —— 未詳歌

これも発想、型ともに類似するものである。以上のようなものを類想類型歌とする。

類想歌

白真弓石辺の山の常磐なる命なれやも恋ひつつをらむ(一一・二四四)——人麻呂歌集

百世しも千代しも生きてあらめやもわが思ふ妹を置きて嘆かふ(一一・二六〇)——未詳歌

類句もなく類型でもなく、唯恋に堪えて生き抜く想を同じくするものである。

橡の衣解き洗ひ真土山本つ人にはなほ如かずけり(一一・三〇〇)——未詳歌

紅は移ろふものぞ橡の馴れにし衣になほ如かずけり(一八・四二〇)——大伴家持

橡の衣を本妻に譬えるという想を同じくするものである。

玉梓の道行かずあらばねもころにかかる恋には相はざらましを(一一・二三九)——人麻呂歌集

玉梓の道ゆきぶりに思はぬに妹を相見て恋ふるころかも(一一・二六〇)——未詳歌

この両歌は逆の表現をとっているが、結局、想を同じくするものである。以上のようなものをもって類想歌とする。

類句類型歌

わが背子にわが恋ふらくは夏草の刈り除くれども生ひ及くごとし(一一・二七六)——未詳歌

わが背子にわが恋ふらくは奥山の馬酔木の花の今盛りなり(二〇・一九〇)——未詳歌

初二句は同句。下三句の主旨の部分は全く異なるが型の上で類似している。かかるものをもって、類句類型とする。

なおこの前歌(一一・二七六)に対して

この頃の恋の繁けく夏草の刈り掃へども生ひ及くごとし(二〇・一九八)

という類歌があるが、この両歌に於て初二句は類想であり、下三句の主旨の部分が、内容表現を同じくする。従ってこれ

は類句類想類型歌として取扱うべきものである。

奥山の木の葉隠れて行く水の音聞きしより常忘らえず（二一・二七二）——未詳歌

秋山の樹の下隠り行く水のわれこそ益さめ御思よりは（二・九二）——鏡女王

三句の序は想を同じくし機能も同じであるが、下二句の主旨は全く異なるもので、これも類句類型の歌とすべきものである。

類句歌

紫の名高の浦の靡き藻の心は妹に寄りにしものを（二一・二七八〇）——未詳歌

吾が身こそ関山越えてここにあらめ心は妹に寄りにしものを（一五・三七五七）——中臣宅守

前者は一般普遍的情感を詠い、後者はその情感の個性的に定着したもので、内容にも発想にも隔りがある。型の上に於ても、前者は序歌、後者は非序歌と相違する。単なる下二句の類句歌とする。

真玉つく遠近かねて結びつるわが下紐の解くる日あらめや（二二・二九七三）——未詳歌

真玉つくをちちかねて言はいへど逢ひて後こそ悔にありと言へ（四・六七四）——坂上郎女

想も型も全く異なるもので、初二句は単なる類句である。

忘草わが紐に着く時と無く思ひ渡れば生けりともなし（二二・三〇六〇）——未詳歌

忘草わが紐に着く香具山の故りにし里を忘れむがため（三・三三四）——大伴旅人

前者は恋の歌、後者は郷愁の歌で、内容を全く異にする。初二句は類句にしか過ぎない。以上の如きものをもって類句歌とする。

ここでさきに触れた巻十一・十二中の異伝の歌即ち「或本歌曰」「一云」の注記のある歌についての類歌関係を、今まで説明して来た類歌分類規準に従って解明してみたい。先ず巻十一・十二の構成順に従って、その注記のある歌を数えてみると次の通りである。

◎印は人麻呂歌集と作者未詳歌の別。△印はその中のさらに細かい部類別を示す。()内の数字はその歌の数。

巻十一

◎人麻呂歌集 △旋頭歌：「一云」(2) △正述心緒の部：「或本歌曰」(2) 「一云」(2) △寄物陳思の部……「或本歌

曰」(1) 「一云」(2)

◎作者未詳歌 △正述心緒の部……「或本歌曰」(4) 「一書歌曰」(1) △寄物陳思の部……「或本歌曰」(2) 「或歌曰」

(1) 「或本歌発句云」(1) 「一書曰」(1) 「一云」(5) 「又曰」(1) △問答……「一云」(1)

巻十二

◎人麻呂歌集 △正述心緒の部……「或本歌曰」(2) 「或本歌発句云」(1) 「或本歌頭云」(1) 「一云」(1) △寄物陳思

の部……「一本歌曰」(1) 「或本歌曰」(4) 「或本歌尾句曰」(1) 「一云」(4) △羈旅発思……「或本歌末句云」(1)

△悲別歌……「一云」(3)

これを注別にまともてみると次のような歌数になる。「或本歌曰の類」には、「或歌曰」「発句曰」「尾句曰」「一書歌曰」などを含む。「一云」の類」には「又曰」を含む。

巻十一―「或本歌曰」の類……十三首。「一云」の類……十二首 合計 二十五首

卷十二「或本歌曰」の類……十五首。「一云」の類……八首 合計 二十三首 総計 四十八首。 但しこの数は

一つの歌で注記の二つある歌（二六一四、二六五五、二九四七）三首を含む数であるから、注記をもつ歌の実数は四十五首ということになる。この数は、作者未詳歌を収録した巻七、十などに比すると遥かに多い。特に巻十一・十二の原本となつたと思われる人麻呂歌集および作者未詳歌の中から、季節感の強いものが、巻十に収まり、その他の歌が、巻十一・十二に収録されたとも考えられ、非常に巻十一・十二と関係の深い巻十の注記のある歌数との間にも、かなりの開きがある。

巻十において「一云」「或云」と注のある歌は十四首。「或本云」の注記は一首にしか過ぎない。しかも「或本云」は語句の校異ではなく、作者の校異である。文学的類聚的編纂態度と考えられる巻七においては、「一本曰」が一首、「一云」の注記は四首である。これらの巻々の「或本歌曰」に類する注記はおそらく、その編纂当時存在した無名の歌集或は柿本人麻呂歌集との間の、文献上の語句の異同の注であろう。「一云」に類する注の中には、文献上の語句の異同を示したのもあるかもしれないが、或は口から耳に伝誦する間に生じた異同の注記もあるのではないかと考える。巻一や巻二などのような、歴史的記録的性格の巻の注記が、記紀の記事との異同、又は憶良の類聚歌林などの名のある歌集との校異であるのとは対称的である。これを逆に言い換えれば、巻七・巻十なども含めて、巻十一・十二の注記は、類歌を意識し、伝本間の類歌、伝誦され耳から聞いた類歌を並載しようとする編纂態度と言えよう。現に「巻十一」人麻呂歌集の部には

香具山に雲居たなびき鬱しく相し子らを後恋ひむかも（二四四九）

雪間よりさ渡る月の鬱しく相見し子らを見むよしもかも（二四五〇）

などの類句類想の類歌が並べ載せられ、「巻十一」未詳歌、奇物陳思の部には

「夜並べて君を来ませとちはやぶる神の社を祈まぬ日はなし（二六六〇）

「吾妹子にまたも逢はむとちはやぶる神の社を祈まぬ日はなし（二六六二）
などの類句類想類型の類歌、

真澄鏡清き月夜の移りなば思ひは止まず恋こそ益さめ（二六七〇）

ぬばたまの夜渡る月の移りなばさらにや妹にわが恋ひ居らむ（二六七三）

などの類句類想の類歌が、二首或は三首目に収録されている。「卷十二」寄物陳思の部にも、

隱沼の下ゆは恋ひむいちじろく人の知るべく嘆きせめやも（三〇二二）

隱沼の下ゆ恋ひ余り白波のいちじろく出でぬ人の知るべく（三〇二三）

真菅よし宗我の河原に鳴く千鳥間無しわが背子わが恋ふらくは（三〇八七）

恋衣着奈良の山に鳴く鳥の間無く時なしわが恋ふらくは（三〇八八）

の例のように、類想或は類句類想と思われる類歌が一首おきに、又は併列して載せられているのである。ここに挙げたのは極く一例に過ぎないが、この現象は、卷十一・十二の編纂者が、典拠とした原本のまま収録したものか、或は正述心緒、寄物陳思の標目に基づいて、原本から選録し、類歌はなるべく近くに記載しようとしたものか、その点疑問は残るとしても、未整理ながらも類歌を示めそうとする意識が働いていたものと考えるのである。このような例は作者未詳の他の巻にも見られるのである。「人麻呂露旅歌八首」中の

荒栲の藤江の浦に鱸釣る白水郎とか見らむ旅行く吾を（三・二五二）

の歌は旅愁の漂う名歌として、既にその価値は定着していたのであろう。卷七には

網引する海子とか見らむ飽の浦の清き荒磯を見に來しわれを(七・一一八七)

〔浜清み磯にわが居れば見むひとは白水郎とか見らむ釣もせなくに(七・一二〇四)〕

などの類歌収録の態度となつて現われてくるのである。この場合にしろ、卷十一・十二の場合にしろ、類歌記載の、ある一定の基準が保たれていない混乱はあるとしても、類歌収録の意図は十分にうかがい得るのである。このことから考えて、卷十一・十二を含めて、未詳歌の巻の、「或本歌曰」「一云」の注記ある歌も、語句の異同を示すという、異伝の歌を示すという意識の裏には、類歌を考察するという作為があったと考えたい。ただ注記という形式をとつたのは、編纂時に典拠とした原本以外の或歌集を対比したり、伝誦歌を対比する結果のものであろう。或は編纂時に見落したり、聞き洩したものを、後になつて、注記で示したものと考えられる。

卷十一・十二の場合、「一云」という注記では、一句から三句まで表記されているが全歌に亘る表記はない。「或本歌曰」の注記の場合は、全歌を表記するものから、三句、二句或は一句だけの表記というように多様に亘っている。これらの注記の歌を、さきに設定した規準によつて分析してみる。

同歌に属するものとしては

浅茅原茅生に足踏みこころぐく吾が念ふ兒等が家のたたり見つ(一一・三〇五七)——未詳歌

一云 妹が家のあたり見つ

これなど注記は一句半であるが、実際には兒等と妹との異同だけで、意味の上に変化はなく、同歌と見做すことができる。少異歌と見做される歌は次の通りである。

長谷の弓櫓が下に吾が隠せる妻 赤根刺し照れる月夜に人見てむかも(一一・三三三二)——人麻呂歌集

一云 人見つらむか

高麗人の額髪結へる染木綿の染みにし心我忘れめや (一一・二四九六) —— 人麻呂歌集

一云 忘れえめやも

前者は旋頭歌後者は短歌の結句、一句の表現の僅少な異なるで、心情の上には何の変化もない。同歌に準ずべきものであるが原則に従って少異歌に入れておく。

その他少異歌に入る歌として

紅の裾ひく道の中に置きて吾や通はむ君が来まさぬ (一一・二六五五) —— 未詳歌

一云 裾つく河を 又曰 待ちにか待たむ

風吹かぬ浦に浪立つ無き名をも吾は負へるか逢ふとはなしに

一云 女と思ひて

前者は第二句あるいは結句の異動を示す二つの注記があり、後者は第四句の異同を示すものである。この他この類に入るべきものの歌の番号を挙げると

〔二・三六三——二五〕〔三・二六〇——或本歌曰〕〔三・二六〇——或本歌発句云〕〔三・三〇〇——二五〕〔三・三〇五——二五〕〔三・三三三——或本歌末句云〕〔三・三三三——二五〕

などの七首が該当する。なおこの他注記には二句表記されているが実際には一句だけの異同を示すものに
健男の思ひ乱れて隠せるその妻 天地に通りに照るとも顯はれめやも (一一・二三五四) —— 人麻呂歌集

一云 丈夫の思ひたけびて

の旋頭歌をはじめとして

立ちて居て為方のたどきも今は無し妹に逢はずて月の経ぬれば(二二・二八八)——未詳歌

或本歌曰 君の目見ずて月の経ぬれば

などの歌があり、この他(二・二六三—二五)(二・四三—二五)(二・三〇六—二五)(二・三六八—或本歌曰)などがこの範疇に入る。

浅葉野に立ち神さぶる菅の根のねもころ誰が故吾恋ひなくに(二二・二八六)——人麻呂歌集

或本歌曰 誰葉野に立ちしなひたる

これなどは二句の注記で二句の異同を示してはおろが、一句は固有名詞の微少なる異同であるので、原則に従って少異歌に入れる。この他全歌表記されているが少異歌と見做されるものに

妹が名もわが名も立たば惜しみこそ布士の高嶺の燃えつつ渡れ(二二・二六九七)——未詳歌

或本歌曰 君が名もわが名も立たば惜しみこそ不尽の高嶺の燃えつつも居れ

古の倭文織帯を結び垂れ誰といふとも君には益さじ(二一・二六二八)——未詳歌

一書曰 古の狭織の帯を結び垂れ誰しの人も君には益さじ

なかなか君に恋ひずは比良の浦の白水郎ならましを玉藻刈りつつ(二一・二七四三)——未詳歌

或本歌曰 なかなか君に恋ひつつあらずは出牛の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る

などの歌がある。結局注記ある歌で少異歌とすべきものは二十一首。注記二つある歌を二首に数えれば二十二首となる。

類句類想類型歌には二句注記のものに

外目にも君が姿を見てばこそ吾が恋止まめ命死なずは(二二・二八八三)——未詳歌

一云 命に向ふ吾が恋止まめ

この注記は二句であるが実際には一句の異同である。しかし倒置法という詠法の異同があるので、ここに入れる。三句の注記であるが実質は二句或は二句半の異同でこの項に属するものとして

路の辺の老師の花のいちじろく人皆知りぬわが恋妻は(二一・二四八〇)——入麻呂歌集

或本歌曰 いちじろく人知りにけり継ぎてし思へば

真に逢はずあるは諾なり夢にだに何しか人の言の繁けむ(二二・二八四八)——未詳歌

或本歌曰 現にはうべも逢はなく夢にさへ

君待つと庭にし居ればうち靡くわが黒髪に霜ぞ置きにける(二二・三〇四四)——未詳歌

或本歌尾句云 白栲のわが衣手に霜ぞ置きにける

などがこの項に入る。その他全歌注記されているが、二句半の異同でこの項に属するものには

磯の上に生ふる小松の名を惜しみに人に知らえず恋ひ渡るかも(二二・二八六二)——入麻呂歌集

或本歌曰 巖の上に立てる小松の名を惜しみに人には言はず恋ひ渡るかも

全歌注記されているが、異同の三句が近似しているためにこの項に入るものとして

血沼の海の浜辺の小松根深めてわれ恋ひわたる人の子ゆゑに(二一・二四八六)——入麻呂歌集

或本歌曰 血沼の海の潮干の小松ねもころに恋ひやわたらむ人の子ゆゑに

などの歌がある。結局類句類想類型歌は以上の六首である。

類句類想歌に属すもの。

慰もる心は無しに斯くのみし恋ひや渡らむ月に日にけに(一一・二五九六)——未詳歌

或本歌曰 奥津波敷きてのみやは恋ひ渡りなむ

三句の注記で、うち一句は類句であるけれども本歌の一句を欠くために、下の句は類想に終っている例である。

ものふの八十氏川の早き瀬に立ち得ぬ恋もわれはするかも(一二・二七一四)——未詳歌

一云 立ちても君は忘れかねつも

上三句は同句であるが二句注によって、下句は類想に終る例である。この種の類句類想の歌の番号を挙げると次の通りである。

〔二・三三九—或本歌曰〕〔二・三五九—或本歌曰〕〔二・三六九—或本歌曰〕〔二・三七八—三云〕〔二・三九〇—或本発句云〕〔三・

二六六—或本頭云〕〔三・三三三—或本歌曰〕〔三・三三三—或本歌曰〕〔三・三三三—或本歌曰〕

この他全歌注記されてはいるが、類句類想歌に入るべきものには

梓弓末はし知らず然れどもまさかは君に縁りにしものを(一二・二九八五)——未詳歌

一本歌曰 梓弓末のたづきは知らねども心は君に縁りにしものを

の歌の上三句は類句、下二句は近似性をもつ。

眉根搔き下いぶかしみ思へるに古人を相見つるかも(一一・二六一四)——未詳歌

或本歌曰 眉根搔き誰かも見むと思ひつつ日長く恋ひし妹に逢へるかも

一書歌曰 眉根搔き下いぶかしみ思へりし妹が姿を今日見つるかも

この歌は二つの注記をもつが「一書歌曰」の方の歌は原歌に対して類句類想歌であり「或本歌曰」の方は類想歌とすべきであろう。結局類句類想歌と考えられる歌は、二六一四の「一書歌曰」の歌を入れて十三首になる。

類想歌は、さきの一一・二六一四の「或本歌曰」の注記の歌と

思へども思ひもかねつ足引の山鳥の尾のながきこの夜を（一一・二八〇二）

或本歌曰 あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねむ

の二首がある。

類句類型歌、類句歌については

思ふにし余りにしかば為方を無み吾はいひてき忌むべきものを（一二・二九四七）——未詳歌

或本歌曰 門に出て吾が恋ひふすを人見けむかも

一云 為方を無み出てぞ行きし家のあたり見に

この二つの注記において、「或本歌曰」の方の歌は単に類句歌であり、「一云」の歌は類句類型と見做すべきである。

湊入の葦別小船障多み今来む吾をよどむと思ふな（一二・二九九八）——未詳歌

或本歌曰 湊入に葦別小船障多み君に逢はずて年ぞ経にける

これも下二句の内容、発想は異なるが、型が類似するので類句類型歌である。

玉かつま島熊山の夕暮に独りか君が山道越ゆらむ（一二・三一九三）——未詳歌

一云 夕霧に長恋しつ、寝ねかてぬかも

初二句を同じくするだけで、下三句は内容、発想は全然異なるので類句歌である。結局、類句類型歌二首、類句歌二首（共

に一首の原歌を共有する」となる。累計すると、同歌(1) 少異歌(2) (一首二つの注記を含む) 類句類想類型歌(6) 類句類想歌(13) 類想歌(2) 類句類型歌(2) 類句歌(2) 総計四十八首。うち注記の二つある二六一四・二六五五・二九四七の三首を一首ずつに数えれば、歌の実数は四十五首である。四十五首の注記による類歌は少異歌、類句類想歌の密度の濃い歌が多いが、類句歌までにもその拡がりをもっている。これはとりもなおさず編纂者なり、注記をつけた者の類歌の概念を示すものと言えよう。

最後にさきに述べた規準によって分類した巻十一・十二の類歌がどのような分布展開がなされているか、考察を試みる。一々歌を例挙する紙面の余裕がないので、類歌の国歌大観の番号を日本数字で示す。○中の数字は巻数。①||①は巻十二中に存する歌であり、①||④は巻十一と巻四の間に存するもの。三つ四つ連続するものは、それだけの巻に亘って類歌として存在するものである。例えば①||④の類句類想歌の項で二六九三(未)||五四四(笠金村)||七二二(家持)||七二六(坂上郎女)とあるのは

かくばかり恋ひつつあらずは朝に日に妹が履むらむ地にあらましを(一一・二六九三)——未詳歌
に対して巻四の

後れゐて恋ひつつあらずは紀伊国の妹背の山にあらましものを(五四四)——笠金村

かくばかり恋ひつつあらずは石木にもならましものを物思はじして(七二二)——家持

外にゐて恋ひつつあらずは君が家の池に住むとふ鳴にあらましを(七二六)——坂上郎女

という一連の類歌関係を示している。※印は二つの項に亘って出る歌である。また①||④の項でみるとその類歌が巻十・

卷四におよんでいる場合には、二四五三^{||}三〇八九^{||}⑩二九九四^{||}④五六八という表記をとっている。() 中は作者名。なお煩瑣になるので所謂類歌の考察に止め、類句歌は除くこととした。類歌の細かい分類になると主観によって、所属するところが変わってくるし、疑問に思われるものは省いたものもあり、或は見落し整理の不十分もあったりして、次に挙げる分類、統計は極くあらましの分布展開である。

- ①-⑪・同歌 二四三九^{||}二七二八・少異歌 二五〇一^{||}二六三四・類句類想類型歌 二四〇八^{||}二八〇八 二四二九^{||}二七〇五
[※]二四四一^{||}二七一九 二四四三^{||}二七九四 二四六〇^{||}二六六九 二六六〇^{||}二六六二・類句類想歌 二三七〇^{||}二四〇一 二三
 九四^{||}二六一九 二四〇七^{||}二六九六 二四二七^{||}二七四九^{||}⑩二八九六^{||}②一〇〇(久米禪師) 二四三六^{||}二七三八 [※]二四四九
^{||}二四五〇 二四六六^{||}二七五五^{||}⑩三〇六三 二四八二^{||}二七八〇^{||}⑩三二四二 二四九八^{||}二六三六 二五〇二^{||}二六三二 二五
 二三^{||}二五八一^{||}⑩二九一一 二五二六^{||}二五四八 二五四一^{||}二九五〇 二五六四^{||}二六三一 二五六五^{||}二五六七 二六四八^{||}二
 六九一 二六七〇^{||}二六七三・類想類型歌 二四六三^{||}二六七〇^{||}二六七三^{||}二六七四 二四六八^{||}二四八〇 二四八九^{||}二七〇六
 二五〇四^{||}二七三四 二五一七^{||}二五五七・類想歌 二三九二^{||}二四四二^{||}二五六七 二三九三^{||}二六〇五 二四三三^{||}二七五六
 二四四四^{||}二六〇〇 二四四八^{||}二七九〇
- ⑪-⑫・同歌 二三九四^{||}三〇八五 二六二〇^{||}二九六九 二六八一^{||}三二二一 二七三二^{||}三一六〇・少異歌 二六八九^{||}三〇四
 三・類句類想類型歌 二四三一^{||}三〇八一 二四九五^{||}二九九一 二五四七^{||}二九二四 二五八八^{||}二九四五 二六三五^{||}二九八七
 二七三五^{||}二九八七 二七四三^{||}三二〇五・類句類想歌 二三六九^{||}二九六三 二三七二^{||}二八六七 二三七三^{||}二八七七 二三七
 六^{||}二九六〇 二四〇二^{||}三二〇一 [※]二四四一^{||}⑩三〇二一^{||}⑩三〇二二 二四六六^{||}三〇六三 [※]二四四九^{||}三〇〇三^{||}⑩二二四
 一(八麻呂歌集) 二四五三^{||}三〇八九^{||}⑩二二九四^{||}④五六八(門部石足) 二四七六^{||}二九九九 二五四一^{||}二九五〇 二五四九
^{||}二九五四 二五九五^{||}二九一七 二六〇四^{||}三〇二一 二六三二^{||}二九七九 [※]二七四二^{||}二九三三(平群女郎) 二七四五^{||}二九

九八 二七七五||三〇七一 二八一||三二〇八 · 類想類型歌 二七四七||三一七七 · 類想歌 二三七四||二九三五 二四二八||
三〇一四 二五四四||三一〇八 二五九六||二九三五 二七六五||二九一三 二八一||二||二九三七

⑫-⑬ · 類句類想類型歌 二八八一||二八九二||二九四一||⑬三二六一 二九八〇||三一〇七 二九九七||三一六五 三〇三六||三〇
六八 · 類句類想歌 二八四二||三一二〇 二八五二||二九六四 二八八三||二九七九 二八九八||二九〇八 二八九五||二九三八
二八九八||二九〇八||④七五六 (田村大嬢) 二九一〇||二九三二||三一〇四 三九一九||二九五八 二九五八||二九五九 二九八六
||二八九九||④五〇五 (安倍女郎) 三〇一五||三〇六八 三〇八七||三〇八八||三一六八||④七六〇 (坂上郎女) 三一八八||三一
九〇||④五五〇 (未詳) · 類想歌 二八七三||三一〇五 二九〇四||三〇四〇 二九一〇||三一〇四 二九三三||三〇五六 三〇二
一||三〇二三

⑪-⑭ · 少異歌 二四一五||五〇一 (人鷹) · 類句類想類型歌 二三九〇||六〇三 (笠女郎) 二五九二||五六六 (大伴百代)

· 類句類想歌 二三五五||六八四 (坂上郎女) 二四三一||五四一 (高田王) ||六九九 (大伴像見) 二四九〇||五七五 (旅人)

二五八三||五七九 (余明軍) ||六六六 (坂上郎女) 二五八四||七一九 (家持) 二五八九||七六七 (家持) 二五九二||五六〇 (大
伴百代) 二六二九||六三六 (湯原王) 二六八五||五二〇 二六九三||五四四 (笠金村) ||七二二 (家持) ||七二六 (坂上郎女)

二七六〇||六八八 (坂上郎女) 二七六七||六六九 (春日王) · 類想歌 二五六七||七五三 (家持) 二五八三||七五一 (家持)

⑫-⑭ · 類句類想類型歌 二八八二||五九五 (笠女郎) 二八七九||六一五 (山口女王) 二九〇三||五六二 (大伴百代) 三〇二八
||五三〇 (聖武帝) 三二〇〇||五六一 (大伴百代) 三一五九||六一七 (山口女王) 三一四四||六四七 (坂上郎女) · 類句類想

歌 二八六八||七三九 (家持) 二九一四||七四一 (家持) 三〇〇六||七三六 (家持) 三〇四一||七八五 (家持) 三〇六二||七

二七 (家持) 三一五九||六一七 (山口女王) · 類想歌 二九一八||七四四 (家持)

⑪-⑭ · 類句類想類型歌 二四三二||一三八三 · 類句類想歌 二三七九||一二四三 二四三四||一三八三 二四七三||一三二四

二八二八||一三二三 二八三四||一三五八 二三六五||一二八〇 ・類想類型歌 二八三九||一三四九

⑫―⑦ ・類想類型歌 三〇三二||一〇八五

⑪―⑩ ・類句類想類型歌 二四四九||一九〇九 二七六九||一九八四 ・類句類想歌 二四一七||一九二七 二四二七||一八九六

二六八〇||二三四四 二六八六||一八三三 二七八四||二二七八 ・類想歌 二五三四||一九三四||一九三六

⑫―⑩ ・類句類想類型歌 二八五七||一九九五 三〇三六||二三四一 三〇三九||二二九一 ・類句類想歌 二八四一||一九二五

二八八四||一九一四 二八九一||一九八五 三〇七三||二〇八六 三一九一||二三〇一 ・類想歌 二八八四||一九一四

⑪―その他の巻 ・少異歌 ※二七四二||⑮三六五二 ・類句類想類型歌 二六七五||③三七三(赤人) 二五三七||⑬三二八五 ※二

七四二||⑭三九三二(家持) 二八〇〇||⑮三六六二(遺新羅使人) ・類句類想歌 二三七四||⑨一七六九(抜氣大首) 二三九九

||⑩三四八二||⑮三五八八||⑮三七七五(遺新羅使人) 二四二六||⑮四〇七三 二五二八||③四七三(河辺宮人) ||⑭三三六五

三五五九||⑥一〇一四(橘文成) 二六一三||⑭三四六九 二六一四或本歌||⑥九九三(坂上郎女) 二六二二||⑥九四七(赤人)

二八〇〇||⑮三六六二(遺新羅使人) ・類想類型歌 二七六一||③三九七(笠女郎) ・類想歌 二八二四||⑥一〇一三(門部王)

⑫―その他の巻 ・類句類想類型歌 三〇七一||⑭三五〇七 三一九六||⑭三四七七 ・類句類想歌 二九四四||⑨一七六八(抜氣大

首) 三〇〇〇||⑭三三九三 三〇四四||②八九(磐姫皇后) 三〇八二||⑮三七四四(中臣宅守) 三一七二||⑭三九六一||⑳四三

三一(家持) 三二一九||⑭三八九五 ・類想歌 二九〇七||⑮四〇八〇(坂上郎女) 三〇〇九||⑮四一〇九(家持)

以上の分布をまとめてみると次のようになる。日本数字は類歌の組の数。算用数字はその歌数を示す。

類 想 歌	類 類 型 歌	類 句 類 想 歌	類 句 類 想 類 歌	少 異 歌	同 歌	
五 10	五 12	一 七 39	六 12	一 2	一 2	⑪ ⑪
六 12	一 2	一 九 41	七 14	一 2	四 8	⑪ ⑫
五 10	0	一 三 32	四 10	0	0	⑫ ⑫
二 4	0	一 二 28	二 4	一 2	0	⑪ ④
一 2	0	六 12	七 14	0	0	⑫ ④
0	二 4	五 10	一 2	0	0	⑪ ⑦
0	一 2	0	0	0	0	⑫ ⑦
一 2	0	五 10	二 4	0	0	⑪ ⑩
一 2	0	五 10	三 6	0	0	⑫ ⑩
一 2	一 2	九 21	四 8	一 2	0	⑪ その他 の巻
二 4	0	六 13	二 4	0	0	⑫ その他 の巻

以上の表から分ることは、類句類想歌が卷十一と十二との間に最も多く分布され、次いで卷十一・十二それぞれの中にも多く分布されていることである。このことは、さきにも触れたように、この両巻が類歌を収録しようとする編纂態度を示すものであり、且つ類句類想歌が類歌における平均値的のものであることを示すものといえよう。

次に注目すべきことは、卷十一・十二の両巻と卷四の間に類歌の多いことである。類句類想類型歌から類想歌までの所謂類歌を合わせてみると、卷十一と卷四との間の類歌は十七組三十八首、卷十二と卷四の間では十四組二十八首、合計三十一組六十六首となる。その間の類歌の多い歌人は家持をはじめ大伴家の人たち、家持をめぐる女性たちである。表にあらわれた類歌の数は、天平初期の大伴家の一族の大伴百代（三首）大伴像見（一首）をはじめとして家持（十一首）卷四以外のものを合せると十四首となる。坂上郎女（五首）卷四以外のものを合せると七首。笠女郎（三首）山口女王（三首）田村大嬢（一首）である。そしてそれらの類歌は人麻呂歌集との間よりも、作品未詳の歌との間に多い。類句歌および整理の上から除かれたものを合せればもっと多くの数に達する筈である。

卷四は藤原朝までの歌、奈良朝初期の歌、天平十六、七年頃までの歌が収録された巻である。しかも其の後半は家持をめぐる女性との贈答歌が位置を占めている。それは家持の青年期に当る歌であり、所謂習作時代の歌である。これらのことから考えて、卷十一・十二の典拠となった原本の人麻呂歌集、未詳歌の部の原本が早くから大伴家にあつて、これらの歌人の作歌の参考に供せられていたものと考ええる。さきに触れた拙論「大伴家持における類歌・類句歌についての一考察」において結論として、家持は類歌的歌人であり、そのよって来るところは「みやび」の風潮が次第に普遍化され、生活の中に融合されると共に、古歌を尊重し、古歌を意識した創作活動となったものであると述べたことがある。卷四における家持の短歌は六十四首であり、その中の類歌約十一首（約というのはまだ増加される可能性を見込して付す）という

数は、比率の上からは大したものではないかもしれないが、古歌を尊重し、古歌を意識した創作は、この習作時代から既に萌していたものと考えられよう。

同歌については、その項の説明で具体的に歌を引例したが、

卷十一の間のもの (a)二四三九(人麻呂歌集)―寄物陳思 〓二七二八(未詳歌)―寄物陳思

卷十一と卷十二の間のもの (b)二三九四(人麻呂歌集)―正述心緒 〓三〇八五(未詳歌)―寄物陳思 (c)二六二〇(未詳

歌)―寄物陳思 〓二九六九(未詳歌)―寄物陳思 (d)二六八一(未詳歌)―寄物陳思 〓三二二一(未詳歌)―問答 (e)二

七三二(未詳歌)―寄物陳思 〓三二六〇(未詳歌)―鬻旅発思

という分布になっている。

(a)の場合のように同じ巻の中で、標目の「寄物陳思」は同じくするものの、片や人麻呂歌集の歌、片や未詳歌として収録されていることは、編纂時の不注意はあるものの、典拠とした人麻呂歌集と、出所不明の未詳歌と二ヶ所にこの歌が存在したことによるものであろう。さきの具体的例歌で分るように、卷十一の人麻呂歌集の歌は極端な略体の表記であり、卷十二の未詳歌の方は非略体歌である点などが、その証左となるものである。こういった点からも、卷十一・十二の歌が流動性のある歌謡の性格をもつものであるということができよう。(b)の場合、卷十一では人麻呂歌集の歌、卷十二では未詳歌となっているのも前と同じ理由によるものであるが、さらにその上、「正述心緒」と「寄物陳思」の相違がある。

「朝影に吾が身はなりぬ」という表現が、「朝影」に寄せたものとも考えられるし、そのものずばりと表現したものとも取れるし微妙な点である。卷十一と十二における「正述心緒」と「寄物陳思」の分類は不明確なものがあつたことは「萬葉集講座六卷十一・十二論」で福田嘉樹氏が詳しく立証しておられる。主観の相違で同歌が両方の標目に属したものと考

えられる。(c)も卷十一と十二の「寄物陳思」の部に同歌の存在することを示したものである。とにかくこのように卷十一と十二の間に同歌が存在し、しかもその同歌が相異なる分類に所属することは、そこに主観が介入していることであって、卷十一・十二が同一人の編集であったとしても、その間に時期の隔絶があったものと言えよう。そのことは次の(d)(e)の場合にも言える。(d)は卷十一で「寄物陳思」の標目に属するものが十二では「問答」の標目の中に入り、(e)は卷十一で「寄物陳思」の歌が、十二に於ては「齋旅発思」の標目に分類されている。これは詠歌の発想の基本的態度を基準とするか、詠歌の場を基準とするかによって分れるものと考ええる。単に両巻の間の同歌を示すというだけでなく、詠歌の場を考えて、同歌が二通りに考えられるという作爲が示されているものと思う。ここにも主観が働き時期の隔絶が考えられるのである。

卷十一・十二には類歌特に類句類想歌が不統一ながら多く収録され、その上注記の歌が多く、そこに各種の類歌の分類が考えられること、さらには不備不用意の点はあるとしても、同歌の分類の作爲が考えられること、など併せ考えて、卷十一・十二の編纂時には、かなりの類歌意識、分類意識があったものと思うのである。(四五・一一・二五)